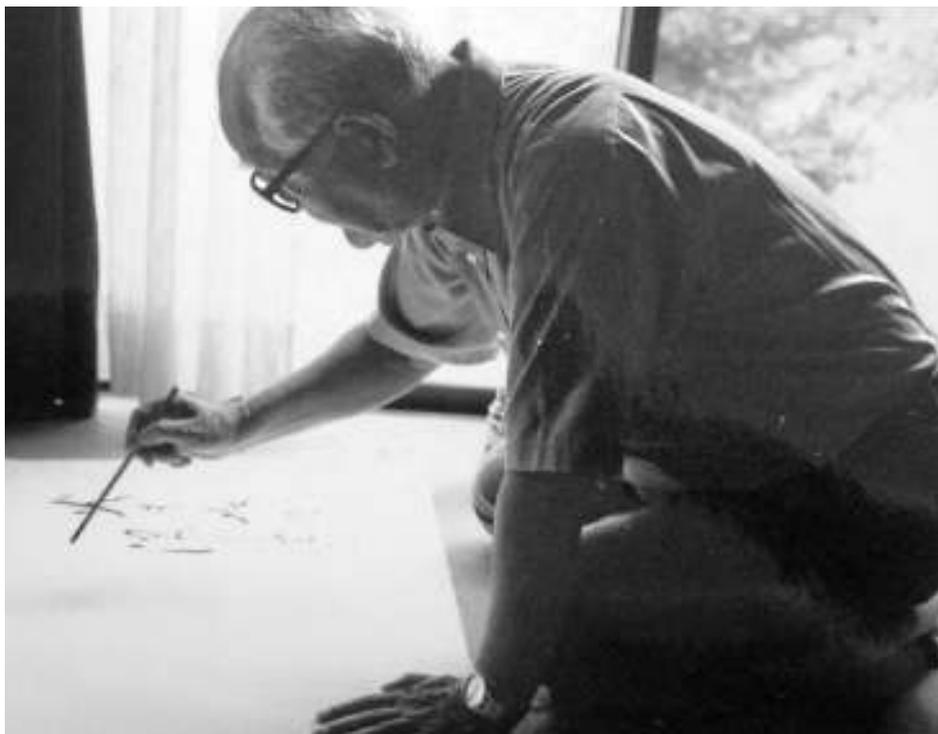


# 千空研究

第4号



## 千空さんの筆文字

千空さんの筆文字は力強く美しい。本格的に習ったことはないようだが、求められて色紙を書くことも多いので、ふだんから練習していたようだった。

千空さんは絵心もあつたし、俳人仲間に画家も多数いた。自分でも俳画も描いていて、「文芸協会に飾ったら」と俳画入りの色紙を5枚持ってきてくれたこともあつた。人前にはあまり出さなかったが、残された資料には俳画の練習帳もある。ふかうら文学館に納める色紙に、俳画を入れることを薦めたが、首を縦に振らなかった。結局、句だけ書き絵は深浦町出身の画家、桜庭利弘さんに描いてもらった。

写真は平成12年8月30日、高橋竹山の三味線を世に広めた青森芸術鑑賞協会事務局長だった佐藤貞樹さんに招かれたとき、八甲田の山荘が気に入ったようで大判の紙に即興で書いた。このときも千空さんの句に、同行の桜庭さんが絵を添えた。

### 火も水も湯も澄む君が山の家

この句は未発表で、佐藤家にだけ残されている。

## 目次

千空さんの筆文字	1
中村弓子さんからのお手紙	2
〈回想の成田千空〉	
草田男句の二重性	3
三ヶ月の師	4
歳時記に採られた千空句③	4
世界自然遺産白神山地『俳句歳時記』	
父・米田一穂と千空	6
青森萬緑会通信句会誌『未来』を中心として(3)	
中村草田男来青同行記の記録から	7
西谷ともえ	
中村草田男選 雑詠句稿	8
千空俳句とその周辺	
永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(3)	9
方言詩人木村助男と成田千空	
齋藤美穂	
千空の師 中村草田男	10
〈千空点描〉鉛筆と消しゴム	2
〈作品鑑賞を読む〉	
春なれや人来て岩の秀に出づる	5
大岡 信	
大粒の雨降る青田母の故郷	11
中村草田男	
〈成田千空資料再録〉④	12
寄贈感謝・会員名簿・北極星	
千空研究会の事業	
① 詳細な年譜の作成	
② 千空俳句データベースの作成	
③ 関係資料の収集	
④ 関係者からの聞き取り	
⑤ 会報『千空研究』の発行	
⑥ 『評伝 成田千空』の刊行	

## 中村弓子さんからのお手紙

お手紙と『中村草田男訪問記』、そして、『千空研究』第一、二、三号をお送り頂きながら、このところ父の松山関係の事で忙殺されておりまして、御礼とお返事が遅くなりましたことをお赦し下さい。

お手紙によりますと、千空さんのご葬儀の時に佐々木様とお目にかかってお話をさせて頂きましたとのこと、お話をして、萬緑の方々とはまた違う青森の方としての千空さんへの愛情を感じさせて頂いたことを思い出しました。

まず、何よりも「成田千空研究会」の発足と「千空研究」の創刊・刊行を心より祝い申し上げます。そして、それらが青森文芸出版から出ますことは、青森の風土と御自身の文学活動を切り離せないものとしていつも考えられておられた千空さんに相応しく、千空さんも喜んでおられることと存じます。

『中村草田男訪問記』を拝読しまして、まず、1949年の東京・吉祥寺の成蹊学園職員寮の訪問記は、私が5歳の時のことですが、子供心に覚えております。このころの父母のありようと住まいの雰囲気を感じておられるのが貴重なのでございました。戦後間もなくの全てが配給の時代で、煙草の配給もあり、「煙草の配給！」という掛け声を幼い私が間違えて「バカナハイク！」と連呼していた、とは、その時代の我が家の笑い話として残っております。

しかし、この訪問記には、若い俳句作家としての千空さんの、師であるもう一人の若い俳人を見つめ、問いかける鋭い眼差しが非常に印象的です。それは、特に「あなたは此の頃すこし焦ってをるようです」という父の指摘をめぐってのところに特に見られます。その時、父は自分自身のスランプとそれからの脱出について語って「意識したところから作品を出発させないように」、「只今の先生は、ある詩感のひらめきが来ると、その対象から動かず、その場で作品をまとめてしまう方式をとっているのだそうである」と記されていますが、これは、私が『わが父・草田男』にも記した、残された父の句帳の変化とも呼応しています。ホトトギス時代の、特に初期の句帳では、下五字が何度も書き換えられたり、推敲の跡が見られるのですが、戦後の句帖は、ほぼ推敲がなく、一気に記されているのです。これは萬緑創刊時代の「芸と文学の総合」という主張からすると、ホトトギス時代は、まだ両者が分離していたところがあって、戦後は句作において生きた総合が成立したところがあるとも言えるのかも知れません。また、母が、作品をどんどん発表しないと俳壇に出る時期がなくなるのじゃないか、と懸念を表明した時の千空さんのムツとした反応は、千空さんらしい「じょっぱり」が出ていて微笑ましく思いました。

『訪問記』でも『同行記』でも、千空さんが、父の中に、作家というものに避けがたい孤独と重荷を見ていらっしやるのも印象的です。それは、この後、千空さん自身が生涯引き受けて生きていかれたものであったでしょう。

成田千空研究会の発足と「千空研究」の刊行は、

市子さんにとってもうれしい出来事であらうと思います。ご無沙汰しておりますが、市子さんにもくれぐれも宜しくお伝え下さいませ。

中村弓子さんは草田先生の三女で、『萬緑』発行人。お茶の水女子大学名誉教授（哲学者、フランス文学者）。『わが父・草田男』（みすず書房）の著作があります。

佐々木あて私信ですが、特にお許しを頂いて掲載しました。

### 【千空点描】

#### 鉛筆と消しゴム

千空さんは、手書き派である。それも万年筆ではなく鉛筆を愛用していた。

それまではボールペンなど使っていたように、「原稿を書くとき手首が痛い」と言う。

昔の新聞記者はザラ紙に鉛筆で原稿を書いた。1ダースの鉛筆を削り芯が太くなったら取り替えて書く。それが一番疲れない。2Bでは滑りが悪いし、4Bでは芯の減りが早いので3Bを使っていた。

千空さんに鉛筆で書くことを勧め、後で鉛筆と消しゴム、鉛筆削りを持っていった。

以来、20年ほど鉛筆で原稿を書き続けた。その文字は柔らかく優しく、千空さんの人柄を表しているようだった。

ふかうら文学館千空の間には、ちびた鉛筆と消しゴム、鉛筆削りが置いてある。〈佐〉

稿嗣ぐや時雨残りの虹の色

（白光）

## 回想の成田千空

### 草田男句の二重性

泉 風信子

五所川原市の菊ヶ丘運動公園に県内で二基目の中村草田男句碑が建立されたのは、平成十四年十一月四日である。草田男の戦後の代表句「炎熱や勝利の如き地の明るさ」が刻まれている。この公園には成田千空さんの「大粒の雨降る青田母のくに」の句碑があり、師の草田男が灼熱の太陽を詠んだのに対して、千空さんは大地への恵みの雨を詠み、「動と静」の対をなすような師弟の句碑として語り継がれることになった。

除幕式の当日は五所川原地域は初霰の叩きつける寒い日だったが、挨拶に立った千空さんは「炎熱の句碑に霰が降るといふのも奇遇ですが、師の句も私の句も共に昭和二十二年、草田男が四十五歳、私が二十五歳の時のものです。先生の句は風土を超えた太陽、つまり生命であり根源です。この二つの句碑がタイアップして俳句の新しい発信源になり、日本の中心になればと願うものです。従って、私自身としても、俳句の芸と文学の問題を追求するためにも八十一歳、もう少し生きていきます」と毅然とした態度を言葉にした。

また草田男の三女で俳誌『萬緑』発行人の中村弓子さんは「八十歳の頃の父はさすがに老衰状態でしたが、口を開けば青年でした。萬緑の中核は

青年であり、娯楽でない俳句を常に求めている姿勢でした」と語る。

成田千空さんと親交の深い文芸評論家の小野正文さんは「二つの句の根底には、国破れて山河あり」がある。草田男が詠んで千空が応える、そんな句碑です」と前置きして

師弟句碑呼応す津軽雪間近か 斧 稜  
と祝句を添えた。



除幕式当日芦野公園を散策、太宰碑の前で。前列中村弓子さん。左から筆者、小野正文さん、福士光生さん。

成田千空という俳人にとって中村草田男はどんな存在なのか。あらためて興味を深くした瞬間だった。除幕式の合間に弓子さんとちと芦野公園を散策、太宰文学碑など訪れる時間があつた。小野正文先生と福士光生さんらと案内役を務めた。俳号の話になった。

「千空は本名の力を分解して音読みにしたもので、病気がちだった無力さで本名のちから(力)は重荷だったらしい」から「草田男」の由来に及んだ。弓子さんは、学生時代の一時期神経衰弱になった草田男が、親戚のひとりから「お前は腐った男だ」と面罵されたことから、自戒と発奮から訓読みと音読みで表す「草田男」を俳号にしたと由来を語っていた。俳号の影に「自分からの脱却」という草田男と千空さんの共通点を見た思いだった。そして何よりも千空さんが『萬緑』に入門したというより、中村草田男に入門したという真意。「萬緑の目的は中村草田男の研究にある」を裏打ちしているように思えるのだった。

中村草田男が目指した俳句は二重性の世界だと定義づけられている。松山中学時代の大正七年以後の強度の神経衰弱から晒される「生きることへの不安」が、この世は計り切れない不思議な二重の世界で迫ってくると受けとめていたと言う。それが俳句に生かされた。草田男は『俳句実習と私』の中で、

——(俳句には)季題を中心とするあらわに表現された有形の現象界と、その背後に感得されるべく暗示されている無形の領域の二重性の世界がある。

と述べている。この二重性に千空さんは惹かれた。昭和十六年に草田男の「青露変」30句を改造社の

『俳句研究』で読みへ汝等老いたり虹に頭挙げぬ山羊なるか」など、これまでの俳句と違う文学として、詩としての魅力と燃えるような野性を感じたと言う。昭和二十一年十月、草田男が主宰誌『萬緑』を創刊すると千空さんは迷うことなく入会、翌二十二年十一月号の『萬緑』に代表句とも言うべき、

大粒の雨降る青田母の故郷  
を發表している。二十五歳だった。このことは「炎熱の句碑」の除幕式の席上で千空さんは述べているが、碑文選定の経緯にも、千空さんは草田男の「勝利」に対する考え方の二重性といのちの根源を見ていたようだ。「大らかな一句です」が感想だった。

灼熱の太陽を詠んだ「炎熱……」句は、昭和二

## 三ヶ月の師

世良 啓

初冬のある日、地方新聞の文化部の方が学校まで訪ねてきたことがある。当時まだ私は高校の教員だった。会議室の窓の外のすっきりした青空はどこまでも高く広がっていた。落葉を終えたからっぽの木々の枝が小春日に揺れている。

「……というわけで、書いて頂けますか？ テーマは何でもいいので」と言われ、それなら千空さんのことを書こう、と思って私はうなずいた。新聞に本格的にエッセイを書くのは初めてだった。春になったら、と私は空を見ながらぼんやり思

十二年の夏、当時勤務先の成蹊学園の寮から見渡せる道路を隔てた真昼の野面を題材にしたものが、草田男は〈自句自解〉で、

——「勝利」を口にのぼし得る可能性が絶無である歴史的段階が、却って私をしてその語を叫ばしめたといえる。

と述べている。敗戦にまみれて、日本人全体が覇気を失なっていた時代。その中で〈勝利の如き〉と昂然と詠み切った、勝利に対する二重性の一句は、今考えても目を覚まさせるような痛快さがある。

師弟碑が建立されてから十三年——。われわれ俳句に携わる者は千空さんの思いを伝えて行くことを忘れてはならない。

(原俳句懇話会副会長、此岸俳句会代表／弘前市)

う。まっ先に千空さんに会いに行こう。千空さんに聞きたいことなら山ほどあったが、多忙を極めた教員生活の中では、ゆっくりお話を伺う時間など到底叶わぬ夢だった。二〇〇七年十一月十七日この日の朝、私は来春退職することを校長に告げただけだった。

翌日、俳人・成田千空の訃報を新聞で知ることになる。間に合わなかった。愕然とした。

その後新聞に「千空さんに俳句をならう」を書いた。追悼になってしまった。

千空さんの命日となったあの日の初冬の青空は胸に深く深く刻まれた。

もし千空さんに出会わなければ、私は世界に文学など別に必要ないと思っていただろう。太宰治と寺山修司のことも勝手に誤解して近寄らないままだった。特に寺山修司は。

### 【歳時記に採られた千空句】③

世界自然遺産白神山地「俳句歳時記」

春 堅雪 堅雪に鳥獣の糞山泰し

蛙焼く 蛙を焼く煙相打ち棚田なり

下萌 人くさき鈍行列草萌ゆる

清水 白神のいのちの清水はらわたに

蛇衣を脱ぐ かなへびの沢の隠れ身また光る

翡翠 青蛇の蛇の彼方山又山

蟻 かわせみの紫紺一閃よき日なれ

青葉 蟻ひたに汝も津軽生まれかな

萬緑 緑さしわが揺りかごの五能線

馬鈴薯の花 万緑や目屋人形はみな乙女

行く秋 高嶺見えむらさき勇む薯の花

きりたんぼ 秋果つる波の阿修羅の五能線

新葉 海やまの夜をたつぷりときりたんぼ

鶺鴒 今年葉焼き尽くしたり波迫る

落鮎 岩千畳鶺鴒よぎり塵もなし

鮎 鮎落ちてなほ山川のちから見ゆ

紫式部 川石の流転の丸み鮎のぼる

短日 実むらさき七重の丘を来し方に

雪晴 日短かや土の色して葉の屋根

氷柱 風浪のいたみは胸に崖つらら

波の花 鷗舞ひ波の花とぶ墳墓かな

鶺鴒 黒松にこもる海鳴り尾白鶺

淑氣 岩ばしる水も淑氣の奥の村

福寿草 海やまの日を法楽の福寿草

\*秋の扉裏に千空の文「神聖な山地」がある。

発行 2004年12月6日  
定価 3150円(税込み)  
編者 草野力丸  
発行 青森県深浦町  
判型 170×180ミ、並製、395頁。

「寺山は前衛イメージが先行して、どうも青森では評判よくないけど、ほんとに真面目で熱心な高校生だったんです。毎日毎日大学ノートにもすごい数の俳句を作ってくるんだから。努力家で、句会でも非常に礼儀正しかった。私も彼に俳句を

教えたの。すごく上手くてね。ちょっと模倣は気になったけど、本歌取りという伝統もある。短歌新人賞をとったときに盗作だとかいじめられたけどあれは違う。若すぎる受賞にみんな嫉妬したんだね。本物だったなあ、あの才能は。」

津軽弁の早口で暖かく語る千空さんのお話を、一九九八年、五所川原高校での講演会で聞いた。当時あの蛇笏賞を受賞したばかりの千空さんはまさに時の人だった。しかし全く偉ぶるところもなく、高校生に対等に俳句を説く千空さんの素朴で誠実な姿は強く印象に残った。

その四年後、育児休業もあと残り三ヶ月という十月、私は思い切って弘前NHKカルチャー講座の俳句教室に申し込んでいた。講師が千空さんだったのだ。

受付嬢は困った顔をした。ベテランの方ばかりだから初心者の方はどうかしら、と言う。見学でいいと言うと安心したように千空さんに紹介してくれた。

鉛筆片手に、投句用紙の分厚い束に高速で眼を通していた千空さんは顔をあげ、私に「じゃすぐつくって。ほんとは三句だけど、ひとつでもいいから」と言った。

私は驚いた。無理です、つくったこと無いし、今日は見学で、と言っても「いいから、さ、早く」と笑って取り合わない。観念して私は急いで二句つくって渡した。

千空さんの句会を思っていたものとはまるで違っていた。集まった人たちは、年齢も性別も職業も感性も何もかも違う。ただ句をつくるという共通項があるだけで、千空さんでさえ一人の投句者でしかなかった。何の敷居もない。各人が俳句

を互いによみ合い、言葉を通してさまざまな角度から熱く語りあう。句は容赦なしの言いたい放題。だがだからこそこの場では誰もが尊重され平等だった。語らいながら知は深まり、心が交わされた。座とはこういうことか。私はすぐに俳句に夢中になった。そしてだんだん言葉と心と社会や世界との繋がりについて考えるようになった。「いい俳句をつくりたかったら、芝居とか映画とか小説とか絵画とか音楽とか、あらゆるものをたくさん勉強しなさい。自然の風景も、この世の中も、その眼でよく見て、自分で感じることで、俳句は一人称の文学なのだから」と千空さんは語った。

国語教師を何年続けてもわからなかった文学という大きな扉を開く大切な鍵を、私はその時、千空さんにいただいた。

翌十一月、たまたま五所川原で行われた中村草田男文学碑の除幕式にも誘っていただいた。千空さんの呼びかけで、先にある千空碑の隣に、師の

#### 【作品鑑賞を読む】②

### 春なれや人来て岩の秀に出づる

大岡信「折々のうた」は、『朝日新聞』第1面の名物コラム。同社100周年を記念し1979年(昭和54)に始まり、短歌・俳句・漢詩・川柳・近現代詩・歌謡のなかから、毎日1つをとりあげるといふ企画。好評を博したので、休載をささんで6700回余りも続き、岩波新書にもなった。

解説文180字以内という制約のなかで、これだけの表現ができたのは詩人の面目躍如。

草田男碑を並べて建てるという、全国でも珍しい師弟碑だった。「師とは何か。年をとればとるほど、そのことを深く思うんだ」と、千空さんはぼつりと言った。

でも育児休業が終わると私は学校に戻らねばならなかった。千空さんから俳句を続けるようにお手紙までいただいたのに、寺山修司のお話も聞かせていただくはずだったのに、果たせなかったこと、悔やんでも悔やみきれない。

俳句とは、文学とは、つまり生きることなのだ。この世に起きることすべてから眼をそらさず、しっかり見聞きし感じて生きること。本当の言葉はそこからしか生まれぬ。文学とは、たぶん人や世界を理解し、愛するためにある。たった三ヶ月だったが、それが師・成田千空から私が学んだことだ。高校生の寺山修司もまた、そのことを千空さんから学んでいたのではなかったか。

(第1回東奥文学賞受賞／藤崎町)

これは1989年(昭和59)3月4日の掲載。

\*

『人日』(昭六三)所収。青空にそびえ立つような大岩。その頂(秀)に人がふと現れた。ただそれだけの情景だが、「春なれや」がこの句を大きく包んで爽快な画面にしている。津軽の俳人。「鷹ゆけり風があふれて野積み藁」「女兒(をみなご)のひとり遊びは雪を摘む」「郭公鳴く眠りの奥の戸が開いて」「手袋の穴から指が出ておのれ」。それぞれの句にどっしりとした明確な風土色がある。

(大岡 信)

## 父・米田一穂と千空

〔青森萬緑会通信句会誌

「未来」を中心として (3) 〕

米田省三

時間は少し前に戻るが、昭和三十三年八月、萬緑全国大会を青森県で開催することになった。県内の萬緑人はその準備に大わらわ、そしてまた大盛會裏に終わらせたいという思いは、例えば、「未来」三十三集の「あとがき」に記した、「会員各位の参加は当然の事と思うが、知友を誘われて、盛會にして貰いたい。少なくとも地元から百名以上出席しなければ「萬緑青森」の名折れになると思う」という記述からもうかがえる。大会は八月三日から五日までであったが、前日二日はいわゆる前夜祭、懇談会ということで浅虫の汐の湯旅館で行われている。この会には、草田男が来青するというので、八戸から加藤憲曠、豊山千蔭、村上しゅらという県内を代表する俳人が参加した。席上、スランプということが話題になり、草田男から「スランプだからといって作句を休んではいけない。絶えず作句していなければ壁を破ることができない。大家連は技巧で乗り切ろうとするが、それでは地肌を荒らしてしまい取り返しのつかないことになる。」というようなアドバイスを得た。「未来」三十三集「あとがき」また、宴会後の深夜まで、「萬緑」に投句された句稿を繰り返し繰り返し読み直して選をし、添削していた草田男の真摯な態度には、涙が出るほどであったと一穂は

「萬緑全国大会の記」(「萬緑」昭和三十三年十月号)で述べている。

本大会は、参加者一五一名、地元からは一〇四名の参加で、萬緑青森支部の面目を保つことができた。本県では初の中央誌の大会で、しかも草田男が来るというので、他結社からの参加も多かった。八月三日は、青森市の自治会館を会場とし、司会は千空で、午前中が主宰者挨拶、萬緑賞等の授賞式、俳句会。午後は川門清明、香西照雄の講演に続き、草田男の「中庸ならぬ中庸の道」と題する講演。例によって熱弁は時間を忘れ、三十分以上もオーバーした。語るべきことを語り尽くさなければ、たとえ時間に制限があっても敢えてそれを無視というか、忘れ去ってしまうのが草田男の流儀であった。時間に無頓着というよりは、これが草田男の誠意というものであろう。夜は八甲荘で座談会、大阪萬緑一行の草田男俳句劇で大いに沸いた。翌四日は吟行で川口爽郎の案内で八甲田山酸ヶ湯温泉から奥入瀬溪流、十和田湖経由で吉川英治ゆかりの温川温泉へ。草田男は、既に十和田湖奥入瀬は昭和二十六年に訪ねており、その時も千空、爽郎が案内していたが、今回の温川温泉は初めてである。わずか三軒ばかりの温泉があるところで、電灯は無し。ランプで夜を過ごすことになるが、当世人気の露天風呂もあり、風狂の士にとっては、格好の宿泊地であった。最終日は弘前市内吟行で解散となったが、ここでも弘前駅から馬車に乗って弘前城まで行くという幸運に巡り会えたという。都会から来た俳人達にとってはさぞかしローカルな感を抱いたであろうが、それが昭和三十三年頃の当地であったのだ。

この全国大会後、県内萬緑重鎮川口爽郎は、作

句意欲がもりもり湧いてきたと「未来」の会員消息で述べているが、当地の萬緑人のみならず、県内の俳人にとっても、得たものは大きかったに違いない。また一穂は、草田男の数々の奇行(?)に接し、――例えば、三日の開会式の日には、会場には確かに来たのに、式が始まる九時になってもどこに居るのか分からず、ようやく三十分くらい過ぎてから両手に金魚ねぶたを持って現れたというところ。なんでも、街で見つけて、それに氣を奪われていたものらしいのである。大切そうに携えて来たということであった。――時間を守るということは当たり前であり、草田男は常人とは異なる行動をとる人だと思っていたが、「私は常識的な生活をしているのですよ」という発言を会期中に耳にしたというのである。そこに、ある種の衝撃を受けたのは確かであった。自分たち凡人のあくせくと暮らす日常が情けなく、かつまた、人間として、詩人として生きるその高邁な在り様を凡庸な自分たちは理解し得ていないのだろうか。時間に追われ、分刻みの生活を余儀なくされながら生きながらえなければならぬ現代人に、草田男の在り方は、なにかしら警鐘を鳴らしているのではないか、そんな思いがしたのであろう。

さて、本大会の仕掛け人である千空は、全国の参加者の注目度から、この本州の北端の地は耕され新しい芽が伸びているということ、その意義を感じたという(「萬緑全国大会の記」(「萬緑」昭和三十三年十月号))。千空は、そこに、自ら耕し、蒔いた俳句の種の成長を見ていたのかもしれないのであった。やがて青森県は俳句王国として、全国注目の的になるのである。

(俳文学会会員／十和田市)

## 中村草田男来青

### 同行記の記録から

西谷 ともえ

青森文芸出版から『中村草田男訪問記』(青森文芸ブックレット②)が出版された。千空さんが、初めて草田男を東京の自宅に訪ねた時のことが、「暖鳥」昭和25年1月号と、新発見となる「日記」から引用されている他、草田男が昭和26年8月に来青した際の「原始の響き」草田男先生同行記(「暖鳥」同年11月号)が掲載されている。

さて、千空さんはこまめに日記を付けたりメモを取ったりしていた。日記は終戦間近な昭和20年のものから存在が確認されている。メモは古いものは藁半紙や反故紙の裏に、新しいものだとルーズリーフや便箋の類などにも書かれており、バラバラになって日付が特定されていないものも多い。そんなメモの中に、厚紙の表紙を付け紙紐で綴じた「記録 千空」と書かれた一束がある。中は藁半紙11枚(いずれも「津軽詩話会」の会誌の反故紙と思われる)、二つ折り袋綴じとなっていて、間に藁半紙(何種類かの反故紙)や原稿用紙などが31枚挟まっている。これらは「原始の響き」草田男先生同行記の草稿であり、草田男接待の事務的な記録であり、またその時の句を書き留めたものである。今回はこの「記録 千空」を元に草田男一行の青森県での足取りをまとめたいと思う。『俳

句は歓びの文学』によると、千空さんは十和田行きの前夜、草田男に「『私は先生と戦うつもりです』と言ってしまっただけのもの、草田男に叩きのめされ」、「せいぜい三十句を『暖鳥』に発表し」たが、「昭和五十一年に句集『地霊』を発表したとき、二十八句を捨てて、二句だけ句集に入れ」たという。

「原始の響き」は八月二十九日の十和田湖を訪れたときの記録文であるが、「記録 千空」には二十五日の草田男を八戸へ迎えに行くところが書かれている。八月二十五日八時三十分青森発で千空さんは尻内駅(現在の八戸駅)へ向かったようだ。その時の句が原稿用紙(ダイト製四百字詰A4・万年筆書き)に書かれ、挟み込まれている。(括弧はルビ)

八月二十五日草田男先生迎へに尻内へ赴く  
胡桃繁る裾も青草師を迎へに

「義」は非情秋の日に欠く屋根瓦

減り込める轍のありき泉ありぬ

一車中・官吏あり社員あり農夫あり

扇子とハンカチ口ぐち合せつゝ口應へ

言はゞ傲岸公器を負ひし汗の鼻

「貧しき人々」齒形無残に林檎喰ふ

夏の晩(おそ)き汽車にかへらぬ物語り

×

雑草(あらくさ)に錆びつくレール師を待ち詫ぶ

世に明き話や落ちず木の實青し

×

一草田男先生を迎ふ

合歡と芒まみひ・羞らひ・そよぎ合ふ

貴に堪えん秋風おこる潦(にはたづみ)

一八戸へ

妻と語る秋栗色の大きな眼

一青森へ

虫の音・千草しりへしりへに鋼鉄車

遠花火師はなまなかに詩を語らず

これら14句が清書されたもので、ここにまとめるまでに原稿用紙や藁半紙に5枚推敲の跡が見られる。但し別の紙(おそらく吹田孤蓬宛て書簡の下書きと思われる)に「句稿『晩夏溪洞』六十句中、左の句を削除して戴きたく……」とあり、「胡桃繁る」「扇子とハンカチ」「言はゞ傲岸」「貧しき人々」「夏晚き汽車」「落ちかけし汽車」「世に明き話」「貴に堪えん」「雄蕊と雌蕊」「遠花火」「幹打つ蚊」「ぶな樹林双●遊ばす」「今は亡き」「羊齒群に」「激つ瀬の真中の州」の十五句を指定している。「晩夏溪洞」は昭和26年12月号掲載で全四十七句。削除洩れのためか、「幹打つ蚊何で己れを殺したる」が入っている。この句は「昨日ここに若き自殺者ありと聞く」と題した2句の内の一ひとつである。残り十四句のうち先の原稿用紙にない句を他の挟み込みの紙から探してみた。

「落ちかけし汽車の止まりし海祭り」(「落ちかけし汽車が止まり汗を拭けり」)

「雄蕊と雌蕊多辯のバラ憂鬱」

「今は亡き元宰相や馬面萩」

「羊齒群に水の鳴りるし師の歩み」

「激つ瀬のまなかの州なる枳憂ふ」(「激つ瀬のまなかの州なる朴憂ふ」)

「ぶな樹林双●遊ばす」の句は確認できなかった。

千空さんは草田男とともに十和田・弘前・浅虫で少なくとも六十一句作り、『地霊』までに、(千空

さんの言葉を借りれば) 五十九句捨てたということになる。(●は判読不能文字)

改めて草田男一行の行程を確認する。挟み込みの藁半紙(B4・津軽詩話会)の会誌の反故紙と思われる・鉛筆書き)には「二十五日、八戸。二十六日、青森県俳句大会。二十七日弘前の大学講座とおおやけの 務めを果たして/に於ける「正岡子規と現代俳句」についての講座。」とあり、全文に鉛筆で字消し線が引かれている。また、「開始の響き」から二十八日は夜遅くまで暖鳥句会が開かれていたことがわかり二十九日は十和田湖に向かったことがわかる。「暖夏溪洞」から二十七日の弘前では長勝寺に立ち寄ったこと、二十九日は十和田で、三十日は蕨沼、三十一日には浅虫に行ったことがわかる。『俳句は遊びの文学』によると、草田男は八日間青森県に滞在し、八戸では正岡子規について、弘前では第二藝術論について話したという。青森では東奥日報社主催の第五回青森県俳句大会の特別選者であった。中央から呼んだ初めての選者だったようである。十和田に行したのは千空さんの他に新岡青草と川口爽郎であった。青森県俳句大会の夜、新岡宅で草田男を囲む句会を深夜まで開いてそのまま新岡宅に泊まり、翌日十和田湖に行ったとあるが、これは幾つかの記録と矛盾する。俳句大会は二十六日で翌日は弘前の公民大学講座、十和田には二十九日に行ったのが正しい。そして少なくとも九月二日まで、九日間は滞在した。

また、幾つかのメモの裏面は草田男歓迎句会の反故紙となっており、それによると「中村草田男先生歓迎」の為青森萬緑会と五能沿線句会の共催

で九月二日(日曜日)午前九時より講演会が板柳小学校で開催され、午前十一時から板柳公民館で句会が開かれた。雑詠四句を八月三十日までに千空さんの書店「暖鳥文庫」に投句することになっていった。千空さんは草田男とどの程度行動を共にしたのか、昭和二十六年の日記の存在が確認できていないため、これ以上の調べがつかなかった。最後に会計簿のメモと思われるものを書き添えて日程の確認とした。

8/25	青森→尻内	140
	尻内→青森	140
8/26	牛乳二本	30
	タバコ	60
8/27	青森→弘前(2人分)	120
	弘前→五所川原	60
8/28	五所川原→大鰐	80
	大鰐→青森	80
8/29	青森→蕨(4人分)	600
	子の口→休屋(4人分)	400
8/30	宿代(4人分)	5000
8/31		
9/1	色紙代(5枚)	250
	青森→板柳(3人分)	300

\*別のメモから二十六日の牛乳二本とタバコは草田男のものであるとわかる。

(青森県近代文学館主幹/青森市)

### 「中村草田男選 雑詠句稿」

#### 千空俳句とその周辺

この資料は、青森県近代文学館が所蔵している。

半紙9枚を袋綴じとし、「中村草田男選 雑詠句稿(第二部)」と表書きがある。来歴は不明だが、判明したことだけ書いておく。

昭和26年(1951)8月、中村草田男が東奥日報社の俳句大会の特別選者として来県された。「記録 千空」には(前稿、西谷による)、「九月二日(日曜日)午前九時より講演会が板柳小学校で開催され、午前十一時から板柳公民館で句会が開かれた。雑詠四句を八月三十日までに千空さんの書店「暖鳥文庫」に投句することになっていた。」とあるから、資料はこのときに作られたものであろう。

半紙の綴りに4句ずつ記載され、最後に川口爽郎と千空の句が筆文字で追加されている。

千空の『俳句は遊びの文学』には、「昭和二十六年の八月末に草田男先生は東奥日報社主催の青森県俳句大会の特別選者並びに公民大学の講師として来青し、八日間ほど青森県に滞在しました。八戸、青森、大鰐、弘前、五所川原、十和田湖、奥入瀬、浅虫、板柳と周り、私と川口爽郎が同行しました。」とあり、「原始の響き―草田男先生同行記―」(『暖鳥』昭和26年11月号)では、十和田湖行きを「八月二十九日」と記している。

9月23日、出句者の1人である板柳町の俳人、太田鉄彬に電話をかけて尋ねた。

「草田男先生が川口先生の家に泊まったと聞いているが、句会が開かれたことも資料の存在も知らない。私が本格的に俳句をやったのはその後で、草田男先生とも会っていない。板柳では学校の先生を集めて講演をした。最初の質問は『先生の名前はなんと読むんですか』だったと聞いている。退院したばかりで、体調がよくない」と言うので訪問を断念した。

「出句者の会津冬耕は、会津耕作のことか」と聞くと、「そうだ」と言う。すでに亡くなったが、

私の友人でりんご農家だった。

冬耕とは板柳町で昔話調査をしたことがある。「中村草田男先生が来たのは、私のりんご園だった。そのとき書いて頂いた色紙がある。千空さんと一緒に俳句をやったことがある」と語っていたが、詳しくは聞かなかった。

資料にある冬耕の句は、いかにも精農らしいもので、初句には4の朱字が書き込まれている。

4 屍室出る歩のかすかにもちろろ、やむ  
農書置く座はゆたかなりちろろの灯

青林檎に對ひ理性を支へをり

林檎の朱の貧しきときは詩哀し

句稿には、32名の名があり、4句ずつ（1部に例外あり）挙げられている。

永沢 ススム、永沢 ふみを、船水 清、

工藤 欽三、太田 鉄彬、三上 悠三郎、

中谷 六郎、桜庭 五柳、会津 冬耕、

永沢 紅陽、吉崎 善太、高田 翠影、

永沢 宗巨、新谷ひろし、東 螢、

永沢 紅緑、工藤きく女、永沢 吟月、

中村幸一郎、永沢 與助、伊藤弥太郎、

安田 了春、米田 旭舟、阿部 秋光、

三上 北人、前田 水馬、若崎三ろ十、

桜庭 梵子、館岡 林影、京武 悠治、

川口 爽郎、成田 千空。

句の上の朱書は草田男の採点と見られる。採点を挙げる。

5 乞食坐にその境遇の汗拭けり 三上悠三郎

5 散るカンナ教師の倫理と、のわず 中谷六郎

4 屍室出る歩のかすかにもちろろ、やむ 会津冬耕

4 母となる日近き呼吸もて西瓜割る 米田旭舟

5 菊そだて都塵にかへるこころなし ”

秀 蟬しぐれ嘘まとまらず着きし門 三上北人

秀 暑休あけもろき白墨はすてて書く 前田水馬

秀 梵鐘再建葡萄の艶をたのしめり 館岡林影

秀 何時の世の誰か罪人つばくらめ 川口爽郎

秀 ねむごろに飯食ふ齡土の霧 成田千空

なお、選外の千空句が3句ある。

月稚く嘔みあてし種嘔みくたく

霧に會ふ人の笑顔をあやしみぬ

誠実さびし芥の中の草鞋虫

これら千空の4句は、津軽詩話会総合雑誌『点』

(昭和26年度)にも掲載されている。

中村草田男句集『銀河依然』には「津軽」78句

があり、「大鰐なる増田手古奈氏に招かれて同氏

邸に一泊す」などの前付がある。

病む我れに住みよき春の朝となり

—永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(3)—

### 方言詩人 木村助男と成田千空

齋藤 美穂

#### 療養生活と文学

『千空研究』第2、3号の資料再録ページに雑誌『月刊東奥』の文芸欄に掲載された千空さんの俳句25句、方言詩99編、小説1編(氏名のみ)を見る事ができます。掲載期間は昭和16年4月号から18年11月号となっていて、これは千空さんが20歳で肺結核のため帰郷し、生家で家族の看病を受けながら療養していた時期にあたります。

「板柳町にて」は4句あり、最初の句は、「野は

林檎町はあかあか晩鴉に満つ」この句碑が板柳町

にある。冬耕が書いてもらったというのは、この

句だろうか。

「千空居にて」は、次の句である。

掌編的な店へ繪慕ひ夏の蝶

草田男揮毫の短冊が成田書店に掛けられていた。

「街道のとある角に佇って、成田千空氏手をあげ

て、斯くと指し教へる。三句」には、太宰治の句

がある。

坪林檎太宰の故郷この奥二里

薊と小店太宰の故郷へ別れ道

太宰の通ひ路稲田の遠き雲の丈

(佐々木達司)

病む我れに住みよき春の朝となり

(昭和16年4月号 佳作)

孟蘭盆を風呂で佛の海となり

(昭和16年9月号 一位)

初まいて体温ほのと覺えけり

(昭和18年4月号 二位)

当時死病と言われ、安静にして過ごすほかはない療養生活。それが千空さんの俳句を始めたきっかけとなりました。俳句を見ると、どこか頼りない病軀から少しずつ回復し、確かな氣力を得ていく暮らしぶりが浮かんできます。

旋風

旋風ア

嵐ごとグリさへで

海の方ッちゃ

逃げで行た

(昭和17年3月号 入選)

この方言詩には地方主義に加わった音楽家・木村弦三による曲がつけられました。弦三は「忘れられた自然に対する幼い思念を蘇らすことに役立てられている」と方言詩を説明しています。戦争や病気に耐えながら母の元で暮らす日々、郷里の言葉は懐深く千空さんを包み励ましたに違いありません。家業で午前3時か4時には起きる母の傍らに座る千空さんの姿を、妹の信子さんは(いつの間)に思っ見ていたそうです。

長姉・寿美栄の紹介で「松濤社」の高松玉麗に師事したのもこの頃で、「郷土俳句」を提唱する師のもとで俳句を学ぶ一方、方言詩や小説に手を染めるといふ文学生活を送りました。昭和18年青森俳句会に参加し、自由闊達な俳句仲間と出合い本気で俳句を志すようになるまで『月刊東奥』のさまざまな文学ジャンルに投稿した2年間は、千空さんに何をもちたっていたのでしょうか。

『月刊東奥』誌上のライブ

昭和14年、東奥日報社の林征次郎が新雑誌『月刊東奥』を創刊します。文芸作品の投稿欄では俳句、短歌、16年には方言詩欄が開設されました。選者は詩人一戸謙三(選者名は伊豆能平)でした。方言詩は掲載される作品数が限られる中、入選や佳作に度々選ばれ、「あるところまで方言詩としての型をつくつてゐるようになった」と評される常連の中に、当時療養中であつた成田力こと成田千空と北郡飯詰村(現五所川原市飯詰)の木村助男がいました。

夏の朝

飯詰村 木村 助男

しつきらど上つた露コば  
踏んで見ろ  
朝の畦行て見なが  
つばめ後さなつたり  
前さなつたり  
かだて來る

秋

青森市 成田 ちから

膝頭のテカレ  
凝ッこど  
視でらけや  
お父ちゃど  
お母ちゃば  
矢鱈ね  
懐らさて來たア

(昭和17年9月号 ともに入選)

二人は俳句欄でも頻繁に名を連ねました。

佳作 小豆煮る師走の櫓火殊によし 千空

佳作 師走なけば南天紅く雪がふる 助男

一位 提灯に來し蚊親しく戻りけり 千空

三位 蚊柱の流れれてゆけり徐ろに 助男

(「蚊」昭和17年7月)

方言詩と俳句―それぞれ多数の応募の中から度々選ばれる二人は、誌上でお互いの名前を認め

千空の師 中村草田男

なかむらくさたお 俳人。本名、清一郎。中国厦門(フモイ)生れ。東大卒。「ホトトギス」同人を経て「萬緑」主宰。全人的な句作を説き、人間探求派と称された。句集「長子」「銀河依然」など。(二九〇―一九八三)『広辞苑』「降る雪や明治は遠くなりけり」の句が知られている。昭和6年大雪の日に、大学生だった作者が、かつて学んだ母校の青南小学校を訪問したとき詠んだもの。

青森県内には、草田男の句碑が2基ある。

玫瑰や今も沖には未来あり

(青森県立図書館)

炎熱や勝利の如き地の明るさ

(五所川原市運動公園)

千空は早くから草田男の俳句に注目、昭和21年、『萬緑』創刊とともに参加。「大粒の雨降る青田母の故郷」が第1回萬緑賞に選ばれる。晩年『萬緑』の選者や代表として師の志を嗣いだ。草田男と千空は師弟の絆で強く結ばれている。

ていたことでしょう。雑誌『月刊東奥』は、昭和12年の盧溝橋事件に始まる日本軍の中国侵攻を背景に、戦地と郷里をつなぐ情報誌としての使命を担うことになりました。その文芸欄は、家族と離れ戦事に携わる県人の望郷の念を受け止めると同時に、病に冒され行き場のない若者に生きがいをもたらしました。生きがいだけではありません。「単なる方言文から漸く文學にまで洗練されねばならぬ時になった」「ひとの作品をよく讀むこと、

また詩ばかりでなく俳句や短歌なども味へるやうにならねば、よい方言詩は書けないのである」といった真摯な選評によって投稿者は意識を高め切磋し、文芸欄には次第に質の高い作品が並ぶことになったのです。昭和18年に27歳の若さで亡くなる助男と戦後俳句の先導者となる千空。文芸欄の作品の数々は、同じ病を抱えながら別々の運命を辿った二人の生きた証を今に伝えていきます。

### 文学がつなげる人と人

方言詩「土筆」が日の目 33回忌直後に発見。

### 【作品鑑賞を読む】③

#### 大粒の雨降る青田母の故郷

父の故郷あれば、それは直ちに一家全体の故郷であるから、「父の」と、ことわる必要がない。「母の故郷」であるからこそ、子供にとっては物珍しいのである。しかも、それは「乳母が里」にちかい、際限のない一種の放埒なくらいの甘えと感傷とを許す。際涯のない青田は母の乳房ある胸のやうに、ありのまゝに生々としてゐて、すべてを享け入れる。時に白雨がくれば、撥き撥いて其白玉を躍らす。母の健気さを見る時のやうに、子供は、うっとりとしてそれを、甘え面白がつて佇ち眺める。一応男性的な情景を描いて、逆効果的に、母性につながるものの魅力を表現してゐる。

〔萬緑〕第12号、昭和22年11月発行「作品欄批評より」

(中村 草田男)

——五所川原市在住の俳人、成田千空さんは「木村さんは当時青年詩人として活躍した。西北五地方ではただ一人方言詩を試みた人であり、この地方の詩壇の作品としては貴重なものだ」と評価している。

〔陸奥新報〕昭和51年3月2日

戦後30年が経過し、かつてのライバルが一編の記事によって結ばれることになりました。昭和51年3月、木村助男の甥にあたる木村捷則さんは、この記事が出たその日に千空さんを訪ねました。古い印のついた『月刊東奥』を持って千空さんに見せると「これ、私の19歳の時のだ」と捷則さんに見言いました。木村助男が新聞に取り上げられ、戦後を代表する俳人・成田千空が認めてくれたことは、捷則さんにとって誇らしく忘れられない出来事でした。

捷則さんは傷痍軍人であった叔父・木村助男が療養しながら書きためた作品集『土筆』を偶然発見し、その方言詩に心を打たれ「我、木村文学を広める」と決意。ひと月に数度もない休日、わからないことを調べては関係者を訪ねて歩きました。平成4年「土筆」の詩碑を飯詰に建立、詩集『土筆』の復刻版を発行、そして今年5月には初めての朗読会の舞台にも立ち、詩集『土筆』を叙情豊かに来場者に伝えました。自分が生まれた翌年に亡くなった名付け親の叔父・助男の遺志を継ぎ、方言詩人・木村助男の名前と作品を世に知らしめようと奔走した経緯と情熱はともこの紙面では書き尽くせません。他人が見ればたいへんなご苦労、しかし捷則さんにとっては生きがいであると言います。

さて、この出会いがきっかけで、俳人・成田千空に関心を持つようになると新たな関わりが見えてきたといえます。助男の出身地である飯詰村は、母方の実家（岡田家）があることから元々千空さんにとって縁のある土地です。捷則さんも小学校の教員であった千空さんの長姉・寿美栄を記憶していました。同じく教員であった寿美栄の夫・岡田晴一（俳号は晴秋）は村の指導的立場にあり、俳句会には助男も出入りしていたといえます。助男と千空さんは歳の差があり直接の面識はないものの、戦前の雑誌の投稿欄から時代を越えて今に生きる人となりがっていくことは、興味深いものがあります。今回も思いがけず千空さんのエピソードを伺うことができました。

『人日』の特装本を注文したら、文芸出版の佐々木さんが「あなたも俳句を作るのですか」と聞いてきた。「我、句集を読むわけではない。けど、千空さんはここでくすぶっている人でねえと思う。」って答えた。したら、やっぱり半年後にすごい賞をとった。いったんは千空さんが「10年、20年騒がれるのではなく、500年ぐらいい残る人ではない」と話してくれたことがある——

かつて文芸欄への投稿では好敵手であった叔父を持つ捷則さんにとっては、その後の千空さんの活躍は喜ばしいことでした。俳句の関係者はもちろんのことですが、さまざまな形で千空さんとながっている方々のお話をまとめることで、あらためてその功績を偲びたいと思います。

(千空研究会調査研究員／五所川原市)

## 俳句・象徴・人間

成田千空

象徴主義が一つの文藝運動として普佛戦争の敗戦によるフランスの苦惱の中から誕生した事實を私は考へる。

舊秩序の世界が、地響をたてて崩れ落ちるその中に、絶望し、分裂し尙も地下へとめりこんでゆく方向にデカダンリズムがあるとすれば、シンボリズムは、まさに羽ばたきも高らかに天上へと昇るすがたであらう。

そこには、なほ永遠を希求してやまぬ人間のひとすぢなるものへの信頼があり、建設への意欲がある故に一層苦難に満ちたものがあつたと云へよう。

浪漫を超越し、人間のあらゆる機能を同時的に解放して自己を表現せざるを得ない場合、人間は人間の有する言葉の限界に突き當る。こゝに一つの象徴的世界へ展開する必然的ポイントがあると考へられるのである。

それと関連して、日本に於ける徳川三百年の閉鎖的歴史の基盤に、萌芽し生育した諸藝術形式もまた別な意味で、象徴的にならざるを得なかつたといふ問題と、もう一つ、和歌、連歌といふ當時の貴族的文藝を民衆文藝へと引きおろして樹立した俳諧が、貞門、談林に依つて常に新しみへと導かれて行つたとは云へ、遂に「おかしみ」「機智」(叡智ではない)の世界から一步も出る事が出来なかつた事實の、その根原を見究めた芭蕉に依つて、

象徴的世界の中に、藝術として確立されて行つた必然性をかへりみないわけにはゆかない。

芭蕉

秋もはやはらつく雨に月の形

この的確に捕捉された自然現象の一断面には、自然と人間、物體的なるものと精神的なるものとの結合があり、表面的には移りゆく季節のあはれを捕捉してゐながら、それを、あはれと感ずる芭蕉そのものの世界の象徴となり、我々はこの十七音のリズムの中に、なほ百万言の表現を感得する。それは内から外へと廣がるかたちをとり、それ故に一層、純粹なる事を考へさせられる。

「我々は智識によつて説明のできない多くのものを有つ。論理的範疇を超した我々の深い人格の中には、純なる藝術によつて表はさる無限に豊富なる先驗的世界」があり「この立場にかへつて、ものを見るときにのみ、世界は一つの象徴として表現」される(西田幾多郎「意識の問題」)といふ、このたゞならぬ厳しさは、我々の俳句が多分に「象徴性イコール藝術性」といふ性格をもつものなるが故に、一層、痛切に感じ、反省せざるを得ないのである。

明治から大正にかけて、子規の平面的寫生に不満を感じた人々によつておこされた新傾向運動は、その動機の純粹さにかゝらず、遂に象徴の境地にまで達せず、あるものは暗示的ならんとし、あるものは餘韻を思はせようとし、あるものは又、含蓄を深からしめようとして、いたづらにキツ屈怪奇な表現に走つた事實人爲的態度を離れようとしては、却つて、その束縛を受け、技巧に陥つて行つた事實を私は考へる。

歸臥久し銀河に耳を疑ふ夜

皓平

思索捨て、旅立つ日江の濶き  
あるひは、無中心をねらつて

響也

雨の花野來しが母屋に長居せり

となり、平面的寫生から飛躍せんとして却つて、不ぞまな四邊形的平面をつくつたに過ぎなかつた事實は、こんにちの我々(何事によらず意識過剰に陥つてゐる現代の人間)にとつても、決して、よそ事として見過ごすことが出来ないのである。

内から外へ。これは並々ならぬ事に違ひない。「俳諧は三尺の童子にさせよ」といふ芭蕉の言葉の中には一種の反語的な要素がひそんでゐるのではないか。それは、さう言はざるを得なかつた芭蕉その人のなげきの表白である、と感じるのは、果して私だけであらうか。

私はこゝに芭蕉の「旅」への契機を考へる。それは根底に於て、例へば、フランス象徴主義の勃興期に遠くその世界を志したボオドレールの「航清」と一脈相通するものであつた。それは隱遁などとは似ても似つかぬ烈しい積極性でもあつたと考へる。

現代——さらに複雑化し、混沌状態にある現代の人間の自己表現としての俳句が、それ自身新しい藝術性を確立し、現代文化に何程かのプラスしようとする場合、「芭蕉の詩精神は、こんにちの俳句づくりなどよりも、むしろ別の部門に於て受けつがれ、生かされるであらう」(桑原武夫氏)などといふ言辭に依つて報ひられることも又、一應納得出来るのである。けれども、それは我々を反省させ、奮いたゞせこそすれ、決して悲觀させるものではない。反對に我々の俳句は、最も象徴性を有する故に、又、最も現代に生きる可能性のある文藝、シヤ

ンルだと云へ得るのではないか。が然し、どういき目に考へても、決して、それは容易な事ではない。かつての新傾向俳句や新興俳句は、俳句を外からなんとかしようとして、遂に意識のデーモンにとりつかれ、人間の喪失に依つて失敗を喫した事實を考へれば、人間の五感のいきいきとした發展、躍動が、まさに先決問題であり、「俳句をなんとかしよう」とする前に、先づ「この人間をなんとか」しなければならぬと考へざるを得ないのである。

昭和22年5月号

(三二、四、七)

## 西東三鬼論

成田千空

(一)

青キ胎兒硝燈古ク地ニ積ル 三鬼

昭和十三年作ダダイズムの匂ひが強い。

——かくて三鬼は葬られ、第二次大戦となる。それから七年。三鬼の言葉を借りると「人として文字通り懸命の歲月」を過ごし、「冷厳な人生觀は、風景の美感よりも生命感に」強く感應するやうになり、戦争が終つた。

或る一日、三鬼は、これも漸く日の眼を見た東京三、石橋辰之助と共に久しぶりで飲んで酔っぱらつて、「俺はこれから當分寫生をやる」と放言したといふ。

これはどういふ意味なのだらう。いつたい「風景の美感よりも生命感を」といふ言葉の中には一見矛盾がある。何故なら、生命感のない風景には美感がないのであり、風景の美感の否定は、そのまゝ風景の生命感の否定であり、それは生命感そのものを否定することになるから

である。が然し、三鬼俳句の實體はこの論法では解決しない。この場合は逆に、生命感のないところにすら美を感じたこれ迄の、三鬼を含めた新興俳句の在り方に對する反省の言葉として受けとるべきであり、又さう取ることによつて切實味をもつ。ダダイズムに對する反省がその一つである。反省はもちろん未來への止揚を意味する。言つてみれば、茶碗を石疊にたゞきつけた快感の後の虚しさ、三鬼をして「古典の新しい研究」に向はせ、「俺はこれから當分寫生をやる」ことになるのだと思ふ。そして當分「俺がやる寫生」は、生命感に目覺めた三鬼にとつて、恐らく世に行はれてゐるスケッチとしての寫生でない事だけは確かであらう。

ところで茶碗をたゞき割つて快感を覺える人間は、茶碗を割るその事を否定しても、茶碗を割る精神が後から後から顔を出す。三鬼は常に新しさを志向し、試みてやまないのである。「俺がやる」ことに「當分」の時間を限定し、その時間に、がむしやりに頭を突つ込む。「何が新しいか」は三鬼は難問だといふ。にもかゝらず「俳句はいつの時代にも新しくなければならぬ」と云ふ彼は、それ故に謂はゞ茶碗を割つて茶碗を知る筆法をとるのであらう。ともあれ、三鬼の動きの行方はわからぬがよい」とミケルアンゼロは云つた。私も又、三鬼を割り切るすべを知らないがゆえに、良くも悪くも云ふわけにはいかない。けれども現に動いてゐる三鬼の、作品の中に、意外に新しいものが眼につくとすれば、その必然性を三鬼のたましひの根元に求めることに依つて、謂はゞ、動きの中の動かぬものの實體を究明し得よう。

(二)

大寒の街にも無数の拳ゆく 三鬼

廣島や物を喰ふ時口ひらく 三鬼

こゝには直觀のひらめきがある。大寒の空氣の中の無数の「拳」や有名なる街の最後に残つた、物を喰ふ「口」は、明らかに「もの見えたるひかり」である。

妥協の代りに統一がある。感覺や知識が勝手にかけ廻ることなく、一個のたましひに統一されて肉体の聲となつてゐる。してみれば意識(經驗)が統一された無意識の状態にこそ直觀の世界があるのであらう。従つて、この場合の無意識の状態とは、零(ぜろ)の状態ではなく、ぎつしり緊つた重みのある静け(注けき)であらねばならない。

我々はしばしば既成概念によつて説明的に物を見てゐる。しかも、その既成概念に依つて形づくられたものを我々の個性だと誤解してゐる場合が多い。

芭蕉が「内」をせめ、「かけり」を説くのも、「内」をせめることに依つて經驗的なものを意識し、「かけり」(注かけり)に心を動かすことに依つて新しい自由の世界を得ることを示したのであらう。自由の世界は肉体化の世界である。私はペンを持つてものを書く。しかもペンが私に依つて自由に動かされるのは、ペンが私の肉体に同化するからに外ならない。同様に「かけり」が外から再び内に歸するところに自由の世界があり、直觀に通ずる道があると考へる。經驗と自我との衝突から「かけり」のいとなみが行はれ、それが再び自我に統一される位置に直觀があるとすれば、これは並々ならぬ「愛」を要する。我々には愛することに依つてのみ内と外との統一を可能にすることが出来るからである。愛することは又熱することである。例へば、オゾンが分解して、純粋な發生期の酸素を生む方程式(O<sub>3</sub>→O<sub>2</sub>)は、意外にも我々に熱することの必要を説く。その点、わが三鬼は、がむしやりに俳句を愛してやまないのである。

そこで、直観から生れる新しみの主体は、自我の發見にはじまり、その自我は意外に底深いところにあるのを知らねばならない。

(三)

三鬼俳句の背後に常に三鬼の肉体が感じられるのは、三鬼が俳句を肉体化してゐる事がたる。

大寒や轉びてもろ手つくかなしき

こゝには三鬼以外の誰もぬない。芭蕉も居なければ蕪村もぬないのである。大寒のつめたい大地にびたりと、もろ手を突いた三鬼は、まことに孤獨である。「咳をし

てもひとり」の放哉の身の廻りも底知れないうつろな光景であり、直ちに死を聯想させるのに對して、大寒の土に、もろ手を突きさるを得なかつた三鬼の身の廻りは寒々としてぬればぬる程、直ちに起き上つて動き出す肉体を聯想させるのは何故であらう。それは、「かなしさ」前前注以前の肉体が、「かなしさ」と云はざるを得なかつたことに依つて一層うきぼりにされてゐるからである。例へば、「痛い」といふ言葉の背後には、「痛くない」よりも一層いきいきとした肉体を聯想させるのと同斷である。しかも「かなしさ」と云はざるを得ない魂といふものは、己の意志以外のものに動かされる己を、意識したものの魂であらう。轉ぶ意志が毛頭無いにもかゝらず、轉ぶときは轉ぶのである。これ以上のかなしみはあらうか。運命を開拓する人間は、開拓する運命をもつた人間であるところに運命の深淵があるとすれば、人間は最早、生き身の己自身に頼る以外に手が無いであらう。そして、己に歸つたところから己は動くのである。

「私はポーズに引きずられてゐる嘘つきものだ。

といふこれがまた私のポーズである(太宰治)」ところ近代人のかなしい宿命がある。

その点、三鬼は己をいつわらない。

赤き火事哄笑せしが今日黒し

みな大き袋を負へり雁渡る

倒れたる案山子の顔の上に天

これらの句に感じられる立体性。或へは

女の手に空蟬くだけゆきにけり

狂院をめぐりて暗き盆踊り

などに見える明らかかなフイクシヨンも、「おれは嘘をつく人間だ」といふ人間の告白の眞實性に通し(注じ)た、三鬼以外の何者でもない俳句である故に生きてゐるとも云へようか。

例へば昭和十三年、三鬼は、當時の低調な俳壇に業を煮やして

垂直降下南京虫の街清く

といふやはり低調至極な、しかし人を喰つた不敬な俳句を發表してゐる。その、飛行機に乗つたことのない三鬼が、乗つたふりをして南京虫の街を身おろす不逞さが、それから十年経つた今日に於て

穀象の群を天より見るごとく

などと、やはり虫けらを上から見おろしてゐるこの事實は、物を平面上に於て見、考へることを好まない三鬼の人間性を物語るものであらう。

青蚊張(注帳の男や寝ても躍る形

の三鬼は、もはや、嘘をついても、本當を喋つても、三鬼自身の肉体から離れない所に来てゐるのであり、そしてこれは明らかに、三鬼俳句の「動きの中の動かぬもの」の實体を示すものでなければならぬ。

(二三、二一、一〇)

昭和23年3月号

## 圓と楕圓

成田千空

——物!。この言葉を私が云ふうちに——(おき、でせうか)ある静けさがおこります。物の周りにある静けさ。すべての運動はしつまり輪郭となり、そして過去と未來の時から一つの永續するものが、その圓を閉ぢる。

〈リツケ(注リルケ)〉

ところで、我々は圓を閉ぢることに依つて靜寂に歸へる「物」に對してすでに興味を失つてゐる。例へば靜寂な水面のある一點に觸れた石は波紋を畫く。けれども我々は波紋を畫いた次の瞬間、石その「物」が靜寂にかへることを知るが故に、波紋の連續する條件として第二第三の石を投ずる必要を感じるであらう。つまり波紋の運命は石の性質に依るのであり、石は、その有するエネルギーを水に傳播することに依つて、石そのものがエネルギーを喪失する性質をもつ。とすれば、我々にとつて興味ある問題は、石その「物」ではなくして、石の有した「エネルギー」でなければならぬ。ところで、このエネルギーは物體の速度に正比例し、その速度は力に正比例し(ニュートンの第二法則)その力は歪みに正比例する(フックの法則)といふ物理学上の法則から、我々は一足飛に「美」の問題を「歪み」の問題に結びつけて考へることが出来ないであらうか。我々の眼にうつたへ、心に觸るゝ「美」の産物は、もともと音、光等の世界の中の營みであつてみれば、音、光等の根元をなす「エネルギー」から「歪み」へと逆行して考へざるを得ないのである。畫家はモデルにポーズをつけることに苦心する。

その解釋は以上の考へによれば、畫家はそのモデルと、  
書くべき位置の間に、何らかの歪みを生み出すべく苦心  
してゐるといふことになる。茶碗は眞上から見るならば

圓形に見え、ある角度からみれば橢圓形に見えるのであ  
り、その角度がつまり歪みであるとも云へようか。(例  
へば、茶碗を鑑賞する場合、人々は殆んどそれを片手に  
捧げて眺め入るのである)。たゞ、どの角度に美を感ず  
るかは、個人／＼に依つて万別であらうし、又、水中に  
於ては物體は屈折し、見えるやうに、環境に依つては、  
圓が橢圓に、つまり橢圓に馴れた眼には、圓形がむしろ  
橢圓的な歪みをもつて眼にうつるであらうといふ相對的  
な想像から、「環境(歴史)と美」の問題を考へれば、  
「ルネッサンスの藝術家は眼はコンパスをもつてゐる」  
といふミケルアンヂエロの言葉も、死から生の一點に向  
つて凝集したあの時期の人間の、美意識の必然性が理解  
されるし、その圓圖形に育てられたその後の人々が、  
徐々にデフォルムの世界に美を見出し來たつて竟に「お  
れは繪を書くのは人生から足を洗ふためだ」といふゴッ  
ホの言葉に及んでゐる事實は、生から再び死の問題に直  
面した人間の到底圓圖形には納まり得ないエレメントが  
あつたと考へられる。つまり歪み(美は)相對的な性質  
をもつものであり、それ故に歴史の流れとは没交渉であ  
り得ないのではないか。

ところで、我々はどうか。

いつたい、圓は一つの中心點を持つた圖形であり、そ  
れ故に單純で、純粹で、すべてが割り切られたコンスタ  
ントの世界であると云へよう。疑はざる一點を有する平  
和の圖であり、古典的であり、善惡の彼岸にある。歴史  
の流れの中に、常にコンスタントを保たうとするもの  
(圓)は、常に人生に對して受身の態度をとらざるを得

ないのである。ブルーストのいはゆる植物型とは、か、  
る圖形を指すのではないか。

ぜんまいのの字ばかりの寂光土 茅舎

桐一と葉日當りながら落ちにけり 虚子

植ゑあげて夕べ田原のしんとしぬ 亞浪

なんといふ静けさであらう。永遠なる空間が一つの圓  
となつて閉ぢた世界——。さすが、これらの作品のもつ  
エネルギーの波紋は絶えることがない。然しこの波紋の  
肌ざはりには、投ぜられた小石の、水面に畫く束の間の波  
紋の感觸に全く似てゐるのに氣付く。つまり、この二つ  
エネルギーは共に圓形の波紋を畫くのである。そこで、  
我々はこの樂園の中を楽しく散歩することは出來ても、  
永住するには明らかに不安を感じる。それは、生きてゆ

く我々の、善惡の場に立つ意志とは何の關係もなく、從  
つて何の解答も與へないからである。曾つてルネッサ  
ンスの藝術家が、人生に對するアクテューブな態度から畫い  
た圓は、こんにちの我々にとつては最早古典以外のもの  
ではない。けれども一方、我々は確かに圓形の樂園も散  
歩し得るといふことは、我々の中にある二つの矛盾した  
ものの存在を示すことにはしなないか。例へば、ユダ  
ヤ教徒からキリスト教徒に回心した筈のパウロが、キリ  
ストを信ずることに、一種の第二次的情熱を要した如く  
我々にも又思惟 肉體の矛盾があり、「不安と恍惚の二  
つが我に」あるのである。花田清輝に依れば、「我々は  
二點間を彷徨し、逡巡する愚を捨て、直ちに二つの焦點  
を持つた圖形を畫く」ことに依つて、轉形期の、あり得  
べき表現としてゐる。二つの焦點を持つた圖形とは、云  
ふまでもなく橢圓である。して見れば「我々の探求する  
のは、タッチの落着きよりむしろ思想の強度ではない  
か」と云はざるを得なかつたゴッホの、あの強靱なタツ

チが、全身的に我々を打つてくる秘密は、生と死の二つ  
の焦點を持つたゴッホその人の、全身的な表現に由來す  
ると考へられるのではないか。

我々がこんにち、蕪村より芭蕉に、いはゆるアポロ的  
なものよりデイオニソスのものに強くひかれるゆえん  
は、否定と肯定の二點間をさまよひつゞけてゐるこんに  
ちの我々の心が、人間の生き身の生活に觸れることを希  
求し、藝術を愛することに依つて生れた蕪村の藝術より  
生活を愛することによつて生れた芭蕉の藝術に、より身  
近なものを感ずる故であらうし、生きた人間の歴史的歩  
みを感じ得ない圓形の、例へば

遠山に日の當りたる枯野かな 虚子

高木より高木に冬日互り行く 虚子

といふ作品に比して (明治三十三年)

はまなすや今も沖には未年(注未悉あり) 草田男

深雪道來し方行方相似たり 草田男

(昭和二十一年)

といふ作品の、十年の歩みのうちに、時間を忘却し、  
空間——沖にこがれた若き日のユートピアンが、雄圖  
むなくも、再び時間の中にふりもどされた哀しい風貌  
に興味を感ずるのである。といふことは、我々の美の對  
象はすでに、靜から動へ、空間から時間へ、圓から橢圓  
へと變貌しつゝあること物語つてゐるのではないだらう  
か。

昭和23年11・12合併号

『中村草田男訪問記』  
千空初期著作をブックレットに



師草田男と千空の初期資料です。新発見の大学ノートに書かれた日記は、『暖鳥』掲載『中村草田男訪問記』の元原稿です。

すが、情景や心理描写が多く、私小説とも読めるものです。『暖鳥』掲載の「草田男先生同行記」と併せて1冊にしました。

A5判、定価(税込み500円) 青森文芸出版。

東奥文芸叢書『成田千空 句集』

千空さんの選句集が、東奥文芸叢書の一冊として刊行されました。これまでの作品の中から、『萬緑』選者の横沢放川氏が選句した361句を収めています。

B6判、定価(税込み1296円) 東奥日報社。

寄贈感謝

齋藤美穂さん

①『通信協会雑誌』1997年11月号コピー

「金秋」5句

②『技術と技能』1979年5月号コピー

「現代秀句鑑賞」神林信一

木村捷則さん

『陸奥新報』1976年3月2日付コピー

(方言詩人木村助男記事、千空のコメント)

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。

1. 調査・研究に関するもの(4000字以内)

2. 回想の成田千空(2000字以内)

締め切り 第5号は1月末、到着順に掲載します。

\* 稿料は差し上げられませんが、掲載紙をお送りします。

送り先 (下段発行所、青森文芸出版あて)

\* Eメールで送信くださる場合

sasaki@abungei.co.jp

会員名簿(40名)

〈青森市〉浅利康衛、西谷ともえ、野沢省悟、吉田州花、成田奉生

〈平内町〉佐藤陽子

〈弘前市〉阿保子星、石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、鎌田義正、後藤隆、館田勝弘、土田紫翠、三上弘之

〈藤崎町〉清水雪江、世良啓

〈八戸市〉上條勝芳、小林凡石、仁科源一、藤田健次

〈十和田市〉日野口晃、米田省三

〈五所川原市〉一戸鈴、葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、野村正彦、浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子

〈板柳町〉木村武彦

〈深浦町〉草野力丸、山本こう女

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

☆北極星☆

○師中村草田男抜きに千空は語れない。中村弓子さんのお手紙は、師弟関係を知る貴重な資料である。泉風信子の「草田男句の二重性」、米田省三の「父・米田一穂と千空」、西谷ともえの「中村草田男来青同行記から」、「中村草田男選 雑詠句稿」もこれに関連するもので、図らずも「草田男特集」のようになった。

○昭和26年、草田男先生が東奥日報社の俳句大会の特別選者として招かれたことは、千空も何度も書いていたが詳細は不明だった。残された千空資料を読み解くことによって、次第に明らかになってきた。

○若いころの千空の文章を読むと、その気負いが伝わってくるようである。工業学校出身のエンジニアだったから科学の法則はもちろん、東西の哲学、俳諧の歴史などを広く学んでいることが分かる。残された資料にも勉強した跡が見られる。

○千俳句データベースは当初の目標1万句を超えた。俳誌など未登録のものも多いが、主要句はほとんど入っている。季語や語彙、人名でも検索ができるので、会員の皆さんが研究に必要なときにご利用いただきたい。今後も資料を集め、増強していく。

2015年11月20日発行  
会報『千空研究』第4号 非売品(会員配布)

発行 俳人 成田千空研究会

佐々木 達 司

〒037-0004

五所川原市唐笠柳藤巻467

青森文芸出版内

TEL 0173-355323  
0173-358414  
FAX 0173-358414